

佐伯一麦 年譜

The Biographical Sketch of Saeki Kazumi

二 瓶 浩 明

NIHEI Hiroaki

This is a biographical sketch of writer Saeki Kazumi until September, 2005. Author of the novel “I”, he was born in the city of Sendai, Miyagi prefecture, in 1959. He was received many awards, including the “3rd Kaien Sinjinsho” Award, the “12th Noma Sinjinsho” Award, the “4th Misima Yukio” Award, the “1st Kiyama Syouhei” Literary Award and the “31st Osaragi Jiro” Award. This is the first summary of his writings.

これは日本現代の私小説家である佐伯一麦の2005年9月までの年譜である。彼は1959年に宮城県仙台市に生まれ、第3回「海燕」新人文芸賞、第12回野間文芸新人賞、第4回三島由紀夫賞、第1回木山捷平文学賞、第31回大佛次郎賞を受賞している。本年譜はこの作家の現在までの文学的事績を記した初めてのものである。

講談社文芸文庫『ショート・サーキット 佐伯一麦初期作品集』（2005年10月10日発行）のために佐伯一麦年譜ならびに著書目録を編纂した。

しかしながら出版社の記載方針や分量等の制約があって、著作の記載についてその多くを割愛せざるを得なかった。文庫本としての性質から、それは仕方がないものの、今後の研究に資するためにも、成果を公けにしたいと考え、ここに発表するものである。

一九五九年（昭和34年）

七月二十一日、父春夫、母ちい子の次男として宮城県仙台市南小泉桃源院東（現、若林区若林三丁目）にて出生。本名佐伯亨。父は大正十四年生まれ、地方公務員。七歳違いの姉と三歳上の兄がおり、三人兄弟の末っ子。

幼児期に少年に性的暴行を受けて、吃音症に罹り、悪夢に悩まされ続ける。また、そのときの母の心ない対応から、以前から抱いていた母親に対する不信を決定的にする。

一九六六年（昭和41年） 六～七歳

四月、仙台市立若林小学校入学。

小学校時代から中学校、高校時代を通じて、家を出て自活するつもりで新聞配達を続けていた。アマチュア無線の免許を取り、モールス信号で外国との交信に熱中していた。また野球少年でもあった。

一九七二年（昭和47年） 十二～十三歳

四月、仙台市立八軒中学校入学。

マーク・トウェインをきっかけに、ヘミングウェイ、ヘッセ、マン、モラヴィア、ジュネ、シリトーなど翻訳小説を愛読する。バスケット部に所属。また中学三年時に椎間板ヘルニアでひと月ほど入院。入院中に生地を舞台とした真山青果『南小泉村』を読んだことがきっかけとなり、田山花袋『蒲団』、島崎藤村『春』『新生』、国木田独步『武蔵野』、長塚節『土』、徳田秋声『徼』などの自然主義文学に親しむようになる。

一九七五年（昭和50年） 十五～十六歳

四月、宮城県仙台第一高等学校入学。県下有数の進学校であったが、その校風に馴染むことができなかった。水泳部、アマチュア無線部、文芸部等に所属。高一修了時の春休みに学業に飽いて夜行列車で十日ほど北海道旅行をする。高二時は金沢に旅行。『死霊』第五章を読んで、友人たちと発行していた同人誌に掲載の埴谷雄高論を埴谷宅にまで届けたという。野間宏、椎名麟三、武田泰淳等の戦後派文学やトルストイ等を読んでいた。

一九七八年（昭和53年） 十八～十九歳

文学者になるべく、大学進学を拒否し、どんな特権性も持つまいとして、前年十二月、卒業式に出席することなく、上京。中退したつもりでいたが、のちに卒業扱いされていたことを知る。

上京したての頃は新宿区西落合のアパートに住み、週刊誌等の記事を書く蟠竜社というフリーライターの事務所に勤めていたが、給料が安いので、都内で書店のアルバイト店員をしたりしていた。この頃、なけなしの給料から全六冊からなる『ファン・ゴッホ書簡全集』（みすず書房）を購入して、以来座右においていた。ペンネームを、ありふれた麦畑の光景を好んで描いたゴッホにちなんで命名。次第に仕事をまかされ、四年ほど企画、取材、原稿執筆のすべてをかねる実力主義のライターの仕事をしてしたが、創作に打ち込むために一転して別の仕事に就こうとして辞職。中上健次、八木義徳「風祭」などを愛読。のち中野区江古田のアパートに転居する。

一九八一年（昭和56年） 二十一～二十二歳

結婚、長女出生。その後、新井薬師、北大塚、川崎市多摩区など、一九九三年頃まで二十回ほど転居を繰り返す。

一九八二年（昭和57年） 二十二～二十三歳

ライター辞職後、一年ほど液晶ガラスの製造や運送会社でマネキンを運ぶ仕事をするなどのアルバイト生活をしていたが、定職について電気工となる。そのかたわら執筆活動を続ける。電気工時代に、当時はよく知られていなかった発がん性物質のアスベストを吸い込み、胸膜炎を発症。以後、喘息に苦しむなど、体調を崩し、現在に続いている。

一九八三年（昭和58年） 二十三歳～二十四歳

第二十七回かわさき文学賞コンクールに本名の佐伯亨（多摩区）名義で、高校時代の習作を整理した小説「静かな熱」が入選。選者は八木義徳。

一九八四年（昭和59年） 二十四歳～二十五歳

次女出生。

小説「木を接ぐ」を「海燕」十一月号に発表。本作で第三回「海燕」新人文学賞を受賞する。選考委員は大庭みな子、瀬戸内晴美、中村真一郎、古井由吉、三浦哲郎。「受賞のことば」を同号に執筆。

一九八五年（昭和60年） 二十五歳～二十六歳

小説「虫が囃う」を「海燕」六月号に発表。

秋口か、干刈あがた宅を訪問。

一九八六年（昭和61年） 二十六歳～二十七歳

小説「転居記」を「海燕」三月号に発表。

小説「朝の一日」を「新潮」十二月号に発表。

長男出生。生まれてまもなく高熱を発して、川崎病という原因不明の難病にかかる。

一九八七年（昭和62年） 二十七歳～二十八歳

「熟した技法が描き出す“人間風景”六つ」（書評・八木義徳『命三つ』）を「新潮」五月号に執筆。

小説「雛の棲家」を「海燕」六月号に発表。

十月、『雛の棲家』を福武書店より刊行。同作が三島由紀夫賞候補となる。

一九八八年（昭和63年） 二十八歳～二十九歳

小説「端午」を「海燕」二月号に発表。同作が芥川賞候補となる。

夏、長女の口を利けなくなる緘黙症と自身のアスベスト疾患を気づかい、郊外に住むべく、妻と三人の子を連れて茨城県古河市総和町に転居。引っ越し費用は全額サラ金から借り、電気工場で配電制御盤配線工として勤務する。基本給だけではとても生活を成り立たせることができず、早朝から深夜に及ぶ残業が月百五十時間を超えることもあり、ものを書けるような状態ではなかった。

「十六歳の旅」を「北海道新聞」八月十七日に執筆。

一九八九年（昭和64年・平成元年） 二十九歳～三十歳

小説「プレーリー・ドッグの街」を「新潮」六月号に発表。

一九九〇年（平成2年） 三十歳～三十一歳

小説「ショート・サーキット」を「海燕」四月号に発表。同作が芥川賞候補となる。

インタビュー「新人作家33人の現在 佐伯一麦」を「文学界」五月号に発表。

小説「ポートレート」を「文藝」秋季号（八月）に発表。

八月、『ショート・サーキット』を福武書店より刊行。本書で第十二回野間文芸新人賞を受賞。その知らせを残業中の工場で聞いた。選考委員は秋山駿、柄谷行人、川村二郎、高橋英夫、三浦雅士。

「八木さんに選んでいただいた処女作」を福武書店『八木義徳全集』第八巻月報八（十月）に執筆。

小説「一輪」を「海燕」十二月号に発表。

「十六歳の春」を「信濃毎日新聞」十二月十四日に執筆。

「私の一九九〇年」を「週刊読書人」十二月二十四日号に執筆。

一九九一年（平成3年） 三十一歳～三十二歳

二月、『一輪』を福武書店より刊行。

小説「ア・ルース・ボーイ」を「新潮」四月号に発表。本作ははじめの三分の一ほどの文章がなかなか固まらず、八十回ほど書き直したという。

「電気屋の道」を「東京新聞」四月十七日夕刊に執筆。

六月、『ア・ルース・ボーイ』を新潮社より刊行。本書で第四回三島由紀夫賞を受賞する。選考委員は江藤淳、大江健三郎、筒井康隆、中上健次、宮本輝。

「生活、労働・・・そして小説」を共同通信配信で六月二十二日に執筆。

島弘之を聞き手とするインタビュー「「私」の内実」を「新潮」七月号に発表<インタビューは同年五月二十日>。

「“おれ”の内実を描く 長距離走者の孤独 アラン・シリトー」を「すばる」七月号に執筆。

インタビュー「ぼく、おれ、私」を「波」七月号に発表。

小説「行人塚」を「新潮」七月号に発表。また三島由紀夫賞「受賞の言葉」を同号に執筆。

山田詠美との対談「内面のノンフィクション」を「海燕」八月号に発表。のち山田詠美対談集『内面のノンフィクション』（一九九二年四月刊、福武書店）に収録。

小説「古河」を「海燕」九月号に発表。

「JA7RQP」を「月刊Asahi」九月号に執筆。

「親はあっても子は育つ」を「バルーン」九月号に執筆。

インタビュー「現代文学と風土」を「河北新報」九月十七日に発表。

八木義徳との対談「私小説の伝統と可能性」を「新刊ニュース」十月号に発表。

「麦主義者」を「海燕」十月号に執筆。

十月二十七日、ラジオドラマ「ア・ルース・ボーイ」（脚色・高橋里実、出演・今井朋彦、安永亜衣、佐藤輝他）がNHK・FMシアターで放送。

「不屈の諦念」（書評・安岡章太郎『夕陽の河岸』）を「群像」十一月号に執筆。

「生命の樹を仰ぐ」（書評・『野口富士男自選小説全集』）を「新潮」十一月号に執筆。

十一月、新潮文庫の山田詠美『ひざまづいて足をお舐め』の「解説」を執筆。

「3K」賛」を「現代」十二月号に執筆。

妻子と別居して、志木、逗子のアパートで仕事をするようになった。

一九九二年（平成4年） 三十二歳～三十三歳

小説「嫌犬記」を「新潮」一月号に発表。

小説「百合根」を「群像」一月号に発表。

「差し出された“反抗”」（『マーク・トウェイン短篇集』回想）を「翻訳の世界」一月号に執筆。

「仙台大黒横丁 鶴仙」を「週刊小説」一月三十一日号に執筆。

一月、福武文庫の古井由吉『招魂としての表現』「解説にかえて——古井由吉氏との交点」を執筆。

「おだやかな中間色の追想」（書評・干刈あがた『ラスト・シーン』）を「波」二月号に執筆。

「読書ノート」を「文学界」二～四月号に執筆。二月M・トウェイン『ハックルベリー・フィンの冒険』、三月S・ヴェイユ『労働と人生についての省察』、四月『妻喰い男——マナット・チャンヨン短編集』

『南小泉村』と『土』を「海燕」四月号に執筆。

「エイズを生きる」（書評・エルヴェ・オベール『ぼくの命を救ってくれなかった友へ』）を「コスモポリタン」六月号に執筆。

「屋根の上の指南書——『アンテナ・ハンドブック』」を「波」七月号に執筆。

「排尿失禁」を「群像」九月号に執筆。

中上健次追悼「茶色の皮ジャン」を「新潮」十月号に執筆。

中上健次追悼鼎談を島田雅彦、渡辺直己とし、「俺を恐れよ、恐れさせよ」として「海燕」十月号に発表（鼎談は八月二十二日）。

十月、宮城県山元町に一家をあげて新築転居。

インタビュー「東北視野に創作活動へ」を「河北新報」十月十八日に発表。

十一月、日中文化交流協会の訪中作家代表団の一員として北京、南京、蘇州、上海など中国各地を旅行する。団長は黒井千次、一行には高井有一、高樹のぶ子がいた。

一九九三年（平成5年） 三十三歳～三十四歳

喘息の大発作を起こし、年末年始を入院して過ごした。

小説「ある帰宅」を「群像」一月号に発表。

『『狂人日記』と私』を福武書店『色川武大阿佐田哲也全集』第十四巻月報十五（一月）に執筆。

「父と子供のいる風景」を「あけぼの」一月号より十二月号まで執筆連載。

「転々の記」全六回を「太陽」一月号より六月号まで執筆連載。

一月、妻子と別れ、故郷の仙台へ戻る。離婚。実家ではなく仙台市青葉区花壇のアパートの一室を借りて住居。川向かいに伊達家三代の御霊屋が見える閑静な場所であった。喘息治療のため大学病院に通院する。

「ジロリ、中国」を「日中文化交流」第五一四号（二月）に執筆。

「鏡の中の自分」（書評・黒井千次『自画像との対話』）を「新潮」三月号に執筆。

「ギッてでも読め！」（書評・川村毅『ギッターズ』）を「波」三月号に執筆。

「中国の建設現場と文学」を「波」四月号に執筆。

「辛夷に会う」を「河北新報」四月二十日に執筆。

「早春の記」を「文学界」五月号に執筆。

「蜘蛛の巣アンテナ」を「河北新報」五月十三日より隔週連載する。約二年間、九五年六月八日まで全五十四回。

「賢治との長い……」を新潮文庫パンフレット『93新潮文庫の100冊』（六月）に執筆。

「電鍵を打つ文学」（書評・丸山健二『見よ、月が後を追う』）を「波」七月号に執筆。

七月末、睡眠薬自殺を図るが、未遂。本人にはその意識はなかったが、遺書をしたためていたことを知り、愕然とする。その後、反応性鬱病の治療のために通院。

日野啓三、三浦雅士との座談会「「私」という現象（特集・変容する「私」）」を「群像」八月号に発表<座談会は同年五月七日>。

「書評」（安西篤子『黒鳥』）を「海燕」八月号に執筆。

「広瀬川べりを歩く」を「朝日新聞」八月十三日夕刊に執筆。

「まぼろしの夏に拾う」を「日本経済新聞」八月二十九日に執筆。

「書評」（古井由吉『魂の日』）を「海燕」十月号に執筆。

十月、新潮文庫の週刊朝日風俗リサーチ特別局編『デキゴトロジー vol.11』に「俺のデキゴトロジー」を執筆。

十月、ホテル仙台プラザにて土井晩翠賞の講演「広瀬川文学遡行——私の文学生成」と題して講演。

小説「渡良瀬」第一回を「海燕」十一月号に発表。以下、九六年九月号まで二十七回にわたって連載するが、「海燕」廃刊によって中絶。完結そして単行本化を目指すというも、現在そのままとなっている。

「落葉焚き」を「東京新聞」十二月七日夕刊に執筆。

一九九四年（平成6年） 三十四歳～三十五歳

小説「木の一族」を「新潮」一月号に発表。

「少年詩篇」を「あけぼの」一月号より十二月号まで執筆連載。

「冬の原っぱ」を「河北新報」一月一日に執筆。

「貫徹された執念」（書評・別唐晶司『メタリック』）を「波」二月号に執筆。

二月、神田美穂と同居。翌九五年十二月入籍。北蔵王山麓、宮城県川崎町の築四十五年の古家を借りる。神田美穂は一九六五年東京都生まれ、八九年東京学芸大学卒業。映画配給会社で宣伝の仕事をしたあと、九二年山形市の大場キミ草木染工房で修業。九七年にオスロ・カレッジ装飾テキスタイル学科に留学。九九年より妹早穂とともに仙台市にて共同制作に携わり、アトリエ穂を運営。九五年河北工芸展宮城県知事賞受賞、朝日現代クラフト展入選など。夫のエッセイ等の挿絵も描く染色工芸家。

大庭みな子との対談「救いとしての異性」を「波」三月号に発表。

「命を拾う」（書評・古井由吉『小説家の帰還』）を「新潮」三月号に執筆。

三月、『木の一族』を新潮社より刊行。

三月八日、渡良瀬遊水池の野焼きを見に行く。

島田雅彦、大岡怜、法月綸太郎、栗本薫、清水義範、司会は沼野充義で、座談会「21世紀の小説へ」を「海燕」四月号に発表<座談会は二月三日山の上ホテル>。

「島田雅彦のこと」を「ユリイカ」六月号島田雅彦特集に執筆。

「我は川の子」を「波」六月号に執筆。

「茶筒」を「日本文藝家協会ニュース」（六月）に執筆。

八月、新潮文庫の山田詠美『トラッシュ』「解説にかえて——山田詠美さんのこと」を執筆。

「広瀬川遡行」を「東京新聞」八月六日、十三日、二十日、二十七日夕刊に四回執筆連載。

「懐かしい現実の手応え」を「朝日新聞」八月十八日夕刊に執筆。

八月、第十三回「海燕」新入文学賞選考会に出席。他の委員は黒井千次、田久保英夫、立松和平、山田詠美。選考会座談会は「海燕」十一月号に発表。

「橋の下の子供」考を「日本経済新聞」九月四日に執筆。

秋、仙台市市民センターの文学講座「本も読みます」の講師をする。

十一月十九日、早稲田大学文学部文芸専修講演会にて「ものを描くということ」と題して講演。

一九九五年（平成7年） 三十五歳～三十六歳

小説「遠き山に日は落ちて」を「すばる」一月号より連載。以下、九六年四月号まで全十四回。

小説「まぼろしの夏」を「群像」一月号に発表。

「川と朝めし」を「新潮」一月号に執筆。

「山麓誌」を「あけぼの」一月号より九六年十二月号まで執筆連載。

講演録「ものを描くということ」を「早稲田文学」二月号に発表。

「去年今年」を「波」二月号に執筆。

「名取川」を「水の文化情報誌 FRONT」第七十七号（二月）に執筆。

「濠端の風景」を「山形新聞」二月二十二日に執筆。

二月、第五回新潮学生小説コンクールの選考。選考委員として他に小川洋子。選評「[学生小説]とは何か」を「新潮」四月号に執筆。

「わが廁」を「現代」四月号に執筆。

四月、市民講座を契機に季刊の読書交流誌「本も読みます」が発刊され、「麦だより」を執筆連載する。二〇〇二年秋（十月）、第三十一号まで。

「豊かな原郷」を「伊達人」第九号・春季号（四月）に執筆。

四月、十日ほど北欧ノルウェー、スウェーデンに取材旅行。

「[古い]の特権」（書評・八木義徳『何年ぶりかの朝』）を「東京人」五月号に執筆。

「反響するもの」（書評・大庭みな子『もってのほか』）を「新潮」六月号に執筆。

「耽読日記 万年床で塩煎餅を噛み砕き『ゴッホ書簡全集』を読む」を「VIEWS」六月号に執筆。

「ポケットの中には」を新潮文庫パンフレット『95新潮文庫の100冊』（六月）に執筆。

六月、新潮文庫のサリンジャー『ナイン・ストーリーズ』『鑑賞のてびき』を執筆。

六月、ビョルグ・アブラハムセンのテキスタイル・アートを見るためにノルウェーを再訪。

「夏至祭りの夜」を「日本経済新聞」七月十六日に執筆。

「BOOKS宮本輝『人間の幸福』」を「GQ」八月号に執筆。

「前略 Y爺様」を「青春と読書」九月号に執筆。

「MIZUへの手紙」を「季刊アクアス」第三十四号（九月）に執筆。

九月、第十四回「海燕」新入文学賞選考会出席。他の委員は黒井千次、田久保英夫、立松和平。選評「[インスタント・カルマ]を推す」を「海燕」十一月号に執筆。

「柘の垣根」を「日本近代文学館」第一四七号（九月）に執筆。

「二つの魯迅故居」を「日中文化交流」（十月）に執筆。

「古家の改造」を「週刊現代」十月十四日号に執筆。

十月、「作家をめざす君に」を『榊原和夫の現代作家写真館』（公募ガイド社刊）に執筆。

十月、ノルウェー三度目の訪問。

十一月、新潮文庫の古井由吉『楽天記』『解説』を執筆。

「峠のたより」を「山形新聞」夕刊に十一月七日より執筆連載<現在継続中>。

「岩野泡鳴への手紙 あんたを認めないのが現代日本のいやらしさの証明さ」を「リテレール」第十四号（十二月）に執筆。

「夏至祭りの夜」を「サントリークォーター」第五〇号（十二月）に執筆。

十二月、新潮文庫の幸田文『木』『解説』を執筆。

一九九六年（平成8年） 三十六歳～三十七歳

島田雅彦との対談「小説が成立する場所」を「野性時代」一月号に発表<対談は前年十月十九日山の上ホテルで>。

「杜の日記帖」を隔月刊のタウン誌「仙台っ子」一月号（第六号）より執筆連載。二〇〇一年二月

号（第三十六号）まで全三十一回。

「正月の風邪」を「朝日新聞」一月五日夕刊に執筆。

二月、『マイ シーズンズ』取材のため、冬のノルウェーを知るために四度目の訪問。北極圏の町トロムソでオーロラを観る。

二月、第六回新潮学生小説コンクールの選考。選考委員は、他に小川洋子。選評「若い声が聞こえる」を「新潮」四月号に執筆。

「シャーレ」を「文学界」四月号に執筆。

「幸田文の『木』について」を「DAGIAN」第二十号（四月）に執筆。

「ディア・ノルゲ 5人の北欧人への手紙」を「東京新聞」四月十一日夕刊に執筆。

四月、「君の本性とことばの原石を手紙に探す」を別冊家庭画報『宮沢賢治をもっと知りたい』に執筆。

『一輪』原作の東映Vシネマ「F・ヘルス嬢日記」（監督・加藤彰、出演・真弓倫子、金子一彦他）が公開。

山田詠美との対談「シンプルで透明なところへ」を「新潮」六月号に発表〈対談は四月十二日〉。のち山田詠美対談集『メン アット ワーク』（一九九八年八月刊、幻冬舎）に収録。

「佐伯一麦さんの田園暮らし」全三回を「朝日新聞」夕刊に五月十一日、十八日、二十五日に執筆。

「まぼろしの文学賞」を「河北新報」五月三十日に執筆。

水村美苗との対談「今ここにはないものへの憧れ」を「波」七月号に発表。

「一頁作家論徳田秋声 タタキの触感」を「新潮」七月臨時増刊「百年の文学」に執筆。

プロムナード欄に連載エッセイ（後日、「山麓より」と命名）を「日本経済新聞」夕刊に七月五日より十二月二十七日まで執筆。全二十六回。

八月、『遠き山に日は落ちて』を集英社より刊行。本書で第一回木山捷平文学賞を受賞する。選考委員は秋山駿、川村湊、三浦哲郎。

八月、第十五回「海燕」新人文学賞選考会に出席。他の委員は黒井千次、日野啓三、立松和平、島田雅彦。選評「正念場」を「海燕」十一月号に執筆。

「前略Y爺様」を「青春と読書」九月号に執筆。

「決定的瞬間」を東北電力PR誌「アルブル」九月、十月号に執筆。

小説「野蒜」を「一冊の本」十月号に発表。

「北蔵王日記抄」を「新刊ニュース」十月号に執筆。

神田美穂との対談「リビング・オン・ムービー」を「映画芸術」に秋号・第三八〇号（十月）より三回にわたって発表。

『渡良瀬』について」を「海燕」十一月号（終刊号）に執筆。

「真空自動車」を「THIS IS 読売」十一月号に執筆。

一九九七年（平成9年） 三十七歳～三十八歳

小説「少年詩篇」を「新潮」一月号に発表。

三浦哲郎との対談「自然の中にことばを求めて」を「すばる」一月号に発表<対談は前年十月二十一日>。

坂上弘との対談「日本文学における“私”（特集・現代日本文学の可能性）」を「群像」一月号に発表<対談は前年十一月六日>。

「よしなしごと」を仙台秋保温泉・岩沼屋パンフレット「花散里だより」第六十六号（一月）より執筆連載<現在継続中>。

「拝啓夏目漱石様」を岩波書店『夏目漱石全集』第二十四巻月報二十六（二月）に執筆。

二月、第七回新潮学生小説コンクールの選考。選考委員は、他に小川洋子。選評「曖昧な態度」を「新潮」四月号に執筆。

「樹下に集う」を東北電力発行「Famita」第十六号（三月）に執筆。

三月七日、第一回木山捷平文学賞『遠き山に日は落ちて』の授賞式に出席するために岡山県笠岡市へ赴く。授賞式は翌八日。受賞の言葉は「ことば抄」として「朝日新聞」三月十八日夕刊に掲載。

「蛙のこと」を三月、共同通信配信で執筆。

「賢治の光る碇子」を筑摩書房『新校本宮澤賢治全集』第十四巻月報十四（四月）に執筆。

宮城県芸術選奨を受賞。

「読書日録」全三回（古本屋にて一、二、イプセンの書齋）を「週刊読書人」四月二十五日号、五月二日号、五月九日号に執筆。

「川筋物語」を「アサヒグラフ」四月二十五日号より連載。九八年六月十九日号まで。

「春の手紙——木山捷平様へ」を「すばる」五月号に執筆。

「編集者からの手紙」を「小説海越」第二号（五月）に執筆。

川村毅との対談「バブル期の戦い」を川村毅『男性失格』（一九九七年五月刊、イースト・プレス）に発表。

「私の読書生活 春は厠からやってくる」を「週刊朝日」五月九・十六日合併号に執筆。

小説「プリズム・他（少年詩篇補遺）」を「波」六月号に発表。

「木山捷平生家にて」を「民主文学」六月号に執筆。

「風の墓のなつかしい佇まい」（書評・南木佳士『冬物語』）を「文学界」八月号に執筆。

「仙台・流れのある街」を「JAF MATE」八月号に執筆。

八月、『少年詩篇』を新潮社より刊行。

八月、染色工芸家の妻・美穂とともにノルウェーに旅立つ。美穂はオスロ・カレッジ装飾テキスタイル学科に留学。翌年七月まで、ほぼ一年間滞在。そのために川崎町の住居と仕事場のアパートを引き払い、仙台市太白区のマンションに居を移す。

「柁の垣の外から 北条民雄への手紙」を「日本経済新聞」八月二十四日に執筆。

古井由吉との「往復書簡・文化の現在 うつろいゆく言葉」を「読売新聞」に十二月一日より四日

まで執筆連載。

一九九八年（平成10年） 三十八歳～三十九歳

小説「凍土」を「群像」一月号に発表。

「一筆啓上 福堂陸奥宗光殿」を「一冊の本」一月号に執筆。

「オスロ蚤の市」を「現代」二月号に執筆。

二月、一時帰国。

二月、最終第八回新潮学生小説コンクールの選考。他の選考委員は小川洋子。選評「文学の素心」を「新潮」四月号に執筆。

「底流していたもの——立原正秋へ」を角川書店『新装版 立原正秋全集』第二十一巻月報二十一（三月）に執筆。

三月、随筆集『蜘蛛の巣アンテナ』を講談社より刊行。

四月、幻冬舎文庫の宮本輝『人間の幸福』「解説に代えて——本書の読者へ」を執筆。

「四十の坂——太宰治と私」を「波」五月号に執筆。

「白夜だより」を「東京新聞」夕刊に六月二十日より七月二十五日にかけて全六回（歓喜の5月！、川番と森の星、辻音楽士、カタコンベン、一本の樹、ハデブラ）執筆連載。

古井由吉との対談「聖なるものの語り手（特集・太宰治歿後五十年）」を「新潮」七月号に発表＜対談は同年二月二十六日＞。

七月、ノルウェーより帰国。

古井由吉との「往復書簡」を「波」八月号に執筆。以下九九年五月号まで全十回にわたって連載。

「神の杜“時空酔い”治まらず」を「河北新報」八月十八日に執筆。

九月五日、青梅市の宗建寺で開かれた干刈あがた七回忌コスモス忌に参列。

九月二十六日、「一輪」原作のラジオドラマ「電気工事士」（脚色・二本美稀子、演出・落合将、出演・光石研、柳愛里、草野康太他）がNHK・FMシアターにて放送。

小説「無事の日」連作を「すばる」十月号に発表。二〇〇一年一月号まで全十五回にわたって連載。

十月、「幸田文学へのアプローチ——『木』を中心に——」を金井景子・小林裕子・佐藤健一・藤本寿彦編『幸田文の世界』（翰林書房刊）に執筆。

「川に佇む心」を「一冊の本」十二月号に執筆。

一九九九年（平成11年） 三十九歳～四十歳

一月、『川筋物語』を朝日新聞社より刊行。

「楽に寄せて」を「あけぼの」一月号より二〇〇〇年十二月号まで執筆連載。

「晩翠賞と新春への思い」を「河北新報」一月十四日に執筆。

小説「庵女」を「i feel」春号に発表。

「触読」を「本の旅人」四月号に執筆。

「麦主義者から冬主義者へ」を「季刊文科」第十一号特集＝上林暁（四月）に執筆。

五月、仙台市内で開催された佐伯一麦の文学講座を母体として設立された麦笛社（のち麦の会）発行の同人誌「麦笛」創刊号に、編集長として仙台市野草園名誉園長の管野邦夫と対談した「ハマナス」は「ハマナス」を發表。「麦の会」は月二回、仙台市市民サポートセンターで短篇小説の鑑賞、エッセイ、短篇小説の実作を行なう会で、佐伯が機関誌「麦笛」の編集人となっている。

勝又浩、前田速夫との鼎談「新人賞応募か、同人雑誌か 文学を志す人びとへ」を「三田文学」第五十七号（五月）に發表。

「浜茄子と浜梨」を「河北新報」五月二十三日に執筆。

七月、北欧デンマークに数日間旅行。

七月十一日、仙台文学館にて開館記念講演「仙台と私の文学」を行なう。

「一語一会 これはプライベートなものだから」を「朝日新聞」六月一日夕刊に執筆。

「The Birds」を「群像」七月号に執筆。

「麦の冒険」を「サントリークォーター」第六十一号（八月）に執筆。

小川国夫、中沢けいととの鼎談「放蕩息子の帰還——志賀直哉の罪をめぐって」を「三田文学」第五十八号（八月）に發表。

「杜の鳥たち」を「東京新聞」夕刊に八月二十三日より二十八日にかけて全六回（鶯、杜鵑、雉、青葉木菟、長元坊、鶴）執筆連載。

「夏時間・冬時間」を「星星峽」九月号に執筆。

九月、第三十一回新潮新人賞選考会に出席。他の委員は李恢成、別役実、福田和也、小川洋子。「選評」は「新潮」十一月号に執筆。

九月、大分県臼杵に旅行。

十月、古井由吉との往復書簡集『遠くからの声』を新潮社より刊行。

「街物語」を「朝日新聞」夕刊に十月二日から三十日にかけて全五回連載發表。

「街物語 オスロ」全五回（神の森、緑の土地、無調の音、丘の上の学校、冬の花火）を「朝日新聞」夕刊に十月二、九、十六、二十三、三十日執筆連載。

小説「杜鵑の峯」を「新潮」十一月臨時増刊に發表。

十一月六日、一九九七年松竹制作で事情があってお蔵入りになっている映画「ア・ルース・ボーイ」（脚本・石川美香穂、監督・細野秀昭、製作・大山幸英、出演・岡田義徳、小嶺麗奈、KONTA他）が、仙台市太白区文化センターにて一度限りで上映され、それに先立って講演。

十一月十五日、南多摩斎場において八木義徳の葬儀告別式があり、司会をする。

八木義徳追悼文「白木の真実」を「毎日新聞」十一月十五日に執筆。

「永遠の現在」（書評・大庭みな子『楽しみの日々』）を「新潮」十二月号に執筆。

十二月、「麦笛」第二号に作家河林満との対談「小説『渇水』をめぐって」を發表＜対談は五月二十五日＞。

二〇〇〇年（平成12年） 四十歳～四十一歳

小説「なめし」を「群像」一月号に発表。

「私を小説家にしたこの一冊 「風祭」八木義徳著」を「三田文学」第六十号（二月）に執筆。

三月、活字文化の復権のためにインターネットというデジタル空間を利用する実験として鐔木能光、森下一仁と「文藝ネット」を立ち上げる。

「コスモス忌のこと（特集・干刈あがた、ふたたび）」を「一冊の本」三月号に執筆。

四月、講談社文芸文庫の和田芳恵『暗い流れ』解説「私小説という概念」を執筆。

四月、「工場に流れたグールド」を文藝別冊『KAWADE夢ムック グレン・グールド』に執筆。

小説「ターン」を「小説新潮」四月号に発表。

「全身で己が行跡を書き留むる蝸牛」（書評・八木義徳『われは蝸牛に似て』）を「群像」五月号に執筆。

「春の枯葉」を「国文学 解釈と教材」五月号古井由吉特集に執筆。

六月、「麦笛」第三号に翻訳家奥幸信との対談「私の電腦文章作法」を発表。また同号に「決定的瞬間」を執筆。

六月、喘息の大発作を起こして入院。

小説「青葉木菟」を「新潮」七月号に発表。

夏、大腸腫瘍切除の手術をする。

九月、『まぼろしの夏 その他』を講談社より刊行。

九月、ホームページ「干刈あがた資料館」に「私と干刈あがた」を寄せる。

九月、第三十二回新潮新人賞選考会に出席。他の委員は李恢成、別役実、福田和也、小川洋子。「選評」は「新潮」十一月号に執筆。

「前略 庵女様」を「本」十月号に執筆。

「身を起こす」（書評・三浦哲郎『短篇集モザイクⅢわくらば』）を「波」十一月号に執筆。

十一月、第二十二回野間文芸新人賞の選考。他の選考委員は奥泉光、川村湊、笙野頼子、久間十義、山田詠美。

小説家熊谷達也との対談「すべては冒険小説から始まる」を「麦笛」第四号（十二月）に発表＜対談は十月二十六日＞。また同号に「水への手紙」を執筆。

十二月九日、「せんだい都市フォーラム 清流への想い～広瀬川～」(仙台市太白区文化センター)において、「私と広瀬川」シンポジウムのパネラーとして出席。

二〇〇一年（平成13年） 四十一歳～四十二歳

小説「プラットホーム」を「小説新潮」一月号に発表。

「21世紀、本はどうなる 紙とネットの棲み分けが進む」を「本とコンピュータ」二〇〇一年冬号（一月）に執筆。

小説「ノルゲ Norge」を「群像」二月号より連載＜現在継続中＞。

四月、『マイ シーズンズ』を幻冬舎より刊行。

四月、文春文庫の山田詠美『対談集内面のノンフィクション』「解説にかえて 『トラッシュ』」を執筆。

「創出された過去」（書評・高樹のぶ子『燃える塔』）を「新潮」四月号に執筆。

「旅ごころは風景をあたらしくする」を「星星映」四月号に執筆。

「よしなしごと」「麦のたより（北欧・オスロ篇）」「ワープロ手書き考」「麦のたより（日本篇）」を鐸木能光『ワードを捨ててエディタを使おう 第2版』（四月刊、SCC）付属CD-ROMに添付。

「サイン会」を「一冊の本」五月号に執筆。

七月、『無事の日』を集英社より刊行。

「私の古典・この一冊 捨子を視る——『芭蕉紀行文集』」を「三田文学」六十六号（八月）に執筆。

「成就された円環」（書評・田久保英夫『生魄』）を「本の話」九月号に執筆。

九月、第三十三回新潮新人賞選考会に出席。他の委員は李恢成、別役実、福田和也、小川洋子。「選評」は「新潮」十一月号に執筆。

十月、『読むクラシック ——音楽と私の風景』を集英社新書として刊行。

「川の土手の光景 志賀直哉の“原点”と現在」を「毎日新聞」十月三十一日夕刊に執筆。

「暮れに読む『新所帯』」を八木書店『徳田秋声全集』第二十五巻月報二十五（十一月）に執筆。

十一月四日、「音楽と私」と題して仙台文学館にて講演。

十一月、第二十三回野間文芸新人賞の選考。他の選考委員は奥泉光、川村湊、笙野頼子、久間十義、山田詠美。

十一月二十三日、「ア・ルース・ボーイ」原作「僕はあした十八になる」（脚本・鄭義信、出演・伊藤淳史、前田亜季、佐野史郎他）がNHKTVで放映。本作は二〇〇一年度テレビドラマ部門で芸術祭大賞を受賞。

十二月八日、サバービア（郊外）をテーマに島田雅彦とシネ・リーブル池袋にて対談。

二〇〇二年（平成14年） 四十二歳～四十三歳

小説「草の輝き」を「婦人之友」一月号より連載。〇三年十二月号まで。

一月、インタビュー「偏在する東北」を『別冊東北学vol.3』に発表。

「読書のリバイバル ジョン・スタインベック」を「文学界」二月号に執筆。

「私の一冊 S・ヴェイユ『労働と人生についての省察』」を「仙台文学館ニュース」創刊号（三月）に執筆。

六月、大腸腫瘍切除の手術をする。

小説「鉄塔家族」を「日本経済新聞」夕刊に七月二十九日より連載。〇三年十一月十五日まで全三八六回。

「杜の日記帖 闊歩する日々」を「Kappo 仙台闊歩」八月創刊号より執筆連載〈現在継続中〉。

十一月、第二十四回野間文芸新人賞の選考。他の選考委員は奥泉光、川村湊、笙野頼子、久間十義、山田詠美。

二〇〇三年（平成15年） 四十三歳～四十四歳

「書評」（高見浩『ヘミングウェイの源流を求めて』）を「文藝」二〇〇三春号（二月）に執筆。

「ガイストの芸術 古井由吉『野川』を読む」を「図書新聞」八月十四日号に執筆。

「いつもそばに本が」を「朝日新聞」十一月三十日、十二月七日、十四日に執筆連載。

十一月、第二十五回野間文芸新人賞の選考。他の選考委員は奥泉光、川村湊、笙野頼子、久間十義、山田詠美。

「惨めさに対する想像力」（書評・F・マコート『アンジェラの灰』完結編『アンジェラの祈り』）を「波」十二月号に執筆。

二〇〇四年（平成16年） 四十四歳～四十五歳

「内の眼・外の眼 鉄塔は家族のように立ち並ぶ」を仙台都市総合研究機構ニューズレター「SURF」第六十七号（一月）に執筆。

齋藤研との対談「草の輝き」を終えて」を「婦人之友」二月号に発表。

「藍の里」を「大法輪」三月号に執筆。

読書エッセイ「小さな本棚」を「河北新報」四月六日より執筆連載〈現在継続中〉。

連休中に、突然、原因不明の群発頭痛の発作に襲われ、脳神経外科に短日入院する。

小説「焼き鳥とクラリネット」を「野性時代」第七号（六月）に発表。

小説「むかご」を「新潮」六月号（創刊一〇〇周年記念特大号）に発表。

「淵に佇む」を「H₂O 仙台の水道」第一三〇号（六月）に執筆。

六月、『鉄塔家族』を日本経済新聞社より刊行。本書で第三十一回大佛次郎賞を受賞する。選考委員は井上ひさし、川本三郎、高樹のぶ子、山折哲雄、養老孟司。

七月、仙台文学館にて「読むことと書くこと」と題して高校生向けに講演。

九月、講談社文芸文庫の色川武大『狂人日記』「解説 遠景の人」を執筆。

九月、訪中作家代表団の一員として十二年ぶりに中国を旅行する。北京、西安、杭州、紹興、上海などを訪問。団長は坂上弘。一行には李恢成、佐藤洋二郎がいた。

小説「かわたれ」を「遊歩人」第三十号（十月）に発表。

十月、『草の輝き』を集英社より刊行。

水上勉追悼文「スイシャンメン」を「群像」十一号に執筆。

「川を想う」を「H₂O 仙台の水道」第一三一号（十一月）に執筆。

十一月、第二十六回野間文芸新人賞の選考。他の選考委員は奥泉光、川村湊、笙野頼子、久間十義、山田詠美。

「坂の一年」を「日本経済新聞」十一月十四日に執筆。

「中国の街路樹」を「日中文化交流」(十二月)に執筆。

「アートのスパイラル ジョウビタキが来た朝に」を「あけぼの」十二月号に執筆。

二〇〇五年(平成17年) 四十五歳～四十六歳

「柊から椿へ」を「山形新聞」等、共同通信配信(一月)で執筆。

「大場キミさんを悼む」を「山形新聞」一月二十九日夕刊に執筆。

一月二十四日、「河水千年の夢 広瀬川ホームページ」に「私の広瀬川」と題するインタビューをアップする。

一月二十七日、東京、帝国ホテルにおける『鉄塔家族』の第三十一回大佛次郎賞贈呈式・祝賀パーティに出席。受賞スピーチ「手抜き工事はしない」を「朝日新聞」一月二十八日に発表。

「川に倣う」を「H2O 仙台の水道」第一三二号(二月)に執筆。

二月二十六日、横浜市開港記念会館で大佛次郎賞受賞記念講演会。

三月、尾道へ旅行する。

三月、木山捷平文学賞エッセイ「木山捷平生家にて」を笠岡市文化・スポーツ振興財団発行『笠岡市文学賞記念誌』に執筆。

インタビュー「無根拠であることと「私小説」－『川筋物語』と『鉄塔家族』をめぐって」を「一冊の本」四月号に発表<インタビューは三月十四日>。

小説「裏の庭」を「表現者」七月創刊号に発表。

「ものぐさ自然観照家の記」を「図書」九月号に執筆。

2005年9月1日現在

(付) 佐伯一麦 著書目録

[単行本]

(小説集)

雛の棲家

1987(昭和62)年10月15日発行 福武書店

ショート・サーキット

1990(平成2)年8月15日発行 福武書店

一輪

1991(平成3)年2月15日発行 福武書店

ア・ルース・ボーイ

1991(平成3)年6月20日発行 新潮社

木の一族

1994(平成6)年3月20日発行 新潮社

遠き山に日は落ちて

- 1996 (平成8) 年8月30日発行 集英社
少年詩篇
- 1997 (平成9) 年8月30日発行 新潮社
川筋物語
- 1999 (平成11) 年1月1日発行 朝日新聞社
まぼろしの夏 その他
- 2000 (平成12) 年9月20日発行 講談社
マイ シーズンズ Dear Bjørg & Helge Abrahamsen
- 2001 (平成13) 年4月10日発行 幻冬舎
無事の日
- 2001 (平成13) 年7月10日発行 集英社
鉄塔家族
- 2004 (平成16) 年6月25日発行 日本経済新聞社
草の輝き
- 2004 (平成16) 年10月10日発行 集英社
(随筆集)
蜘蛛の巣アンテナ
- 1998 (平成10) 年3月31日発行 講談社
遠くからの声 ——往復書簡——
古井由吉との共著
- 1999 (平成11) 年10月30日発行 新潮社
読むクラシック ——音楽と私の風景
- 2001 (平成13) 年10月22日発行 集英社新書
(その他) 再録
花梨酒 エッセイ'94
1994 (平成6) 年5月 日本文藝家協会編 楡出版
「広瀬川べりを歩く」を収録
- 大きなお世話 エッセイ'96
1996 (平成8) 年6月 日本文藝家協会編 光村図書出版
「わが厠」を収録
「海燕」新人文賞全受賞作品 1982～1996
1996 (平成8) 年10月 干刈あがた・他 ベネッセ・コーポレーション
「木を接ぐ」を収録
- 田舎暮らしの達人たち
1998 (平成10) 年3月 岡村健編 晶文社
「賃貸型田舎暮らしの提案」を収録
- 文学1998
1998 (平成10) 年4月 日本文藝家協会編 講談社
「少年詩篇 (抄)」を収録
- 不滅の弔辞
1998 (平成10) 年8月 「不滅の弔辞」編集委員会編 集英社
「中上健次様への追悼の言葉」を収録

花のともだち木のともだち エッセイ'99

1999 (平成11) 年7月 日本文藝家協会編 光村図書出版
「二つの鲁迅故居」を収録

文学2001

2001 (平成13) 年5月 日本文藝家協会編 講談社
「なめし」を収録

新茶とアカシア 2001年度版ベストエッセイ集

2001 (平成13) 年6月 日本文藝家協会編 光村図書出版
「夜鳥」を収録

落葉の坂道 ベストエッセイ2002

2002 (平成14) 年6月 日本文藝家協会編 光村図書出版
「川の土手の光景」を収録

発見 幻冬舎文庫

2004 (平成16) 年8月 よしもとばなな・他 幻冬舎
「夏時間・冬時間」を収録

一語一会 人生に効く言葉

2005 (平成17) 年5月 朝日新聞社編 亜紀書房
「一語一会 これはプライベートなものだから」を収録

単行本初出のものは「年譜」に編入する方針をとった。
ここにあげたものは編共著の中に再録されたものである。

[文庫]

ア・ルース・ボーイ

1994 (平成6) 年6月 新潮文庫
(解説=山田詠美)

一輪

1996 (平成8) 年3月 新潮文庫
(解説=細貝さやか)

ショート・サーキット

1996 (平成8) 年4月 福武文庫
(解説=川村二郎)

木の一族

1997 (平成9) 年3月 新潮文庫
(解説=福田和也)

遠き山に日は落ちて

2004 (平成16) 年10月 集英社文庫
(解説=池上冬樹)

川筋物語

2005 (平成17) 年4月 朝日文庫
(解説=椋少工門)

2005年9月1日現在